

介護福祉士課程における学内授業科目と学外実習の 関係性についての研究

浅野 いずみ

(人間学部人間福祉学科)

A Study on the Relationship between On-campus Course Subjects and Off-campus Practical Training in the Certified Care Worker Program

Izumi ASANO

(Department of Social Welfare Services, Faculty of Human Sciences)

介護福祉士養成教育において、学内で学ぶ各科目の授業と学外で行う介護実習との関係性は高い。授業で学んだ知識を実習の場で活用することで、専門職としての実践力につながる。学内で学んだことを実習でどのようにいかすことができるのか、また実習で学んだことを学内での学習にどのようにつなげて学びを深めていくのか注目して検討を行う。本研究をとおして、①科目間連携を意識することの必要性、②アクティブ・ラーニングの有効性を確認することができた。さらに今後の課題として、①今回得られた結果を授業の改善に役立てていく、②介護実習Ⅱ・Ⅲについてもどのようにいかされていくのか継続して取り組んでいく、③「コミュニケーション技術」「認知症の理解」も含めて、連携のあり方を考えていく、④今回は介護福祉士養成における教育内容の全体像のごく一部の検討に過ぎないため、全体像をとらえた検討に発展させていく、等が挙げられた。

キーワード：介護福祉士、学内授業、学外実習、介護実習、学習効果

はじめに

介護福祉士養成教育において、学内で学ぶ各科目の授業と学外で行う介護実習との関係性は高い。授業で学んだ知識を実習の場で活用することで、専門職としての実践力につながる。こうした介護福祉士の養成教育は、厚生労働省社会・援護局長通知(2011)「社会福祉士養成施設及び介護福祉士養成施設の設置及び運営に係る指針について」においてカリキュラム・学ぶべき内容が示されている。その内容に準拠して各種テキストが執筆され、テキストを用いて授業も進められることが多い。しかし、介護福祉士養成施設における教育内容として「領域」「教

育内容」「ねらい」「教育に含むべき事項」は示されているが、具体的な教授法までは示されていない(表1参照)。

また厚生労働省(2009)では、「介護福祉士養成課程における教育内容の見直しについて」¹において「資格取得時の到達目標」が示されている(表2参照)。しかしどのようにして各教育内容における学びを関連づけ教授し、資格取得時の目標に到達させていくのかについては具体的には示されていない。

ただし、前述の厚生労働省社会・援護局長通知(2011)において、「8教育に関する事項」として「(2)別表1から3までに定める教育内容ごとに、

資格取得時の介護福祉士養成の目標、当該教育内容が含まれる領域の目的及び当該教育内容のねらいを踏まえ、介護福祉士養成施設としてふさわしい科目となるよう、科目編成を行うこと。この場合、当該教育内容に係る科目には、当該教育内容に係る教育に含むべき事項が全て含まれていること。また、一の教育内容に複数の科目を設定する場合には、一の科目に少なくとも一以上の教育に含むべき事項が含まれ、かつ、当該教育内容に係る全科目をとおして教育に含むべき事項が全て含まれていること。』²と示され、各教育内容の関連性や全体像をとらえた教育が必要とされることがうかがえる。

そこで本研究では、介護福祉士養成教育の全体像の中から、各教育内容の関連性について意識し、授業科目連携の取り組みの一例として学内授業科目から「介護の基本Ⅱ」「介護の基本Ⅲ」、学外実習から「介護実習Ⅰ」「介護実習Ⅱ」について取り上げ、学内で学んだことを実習でどのようにいかすことができるのか、また実習で学んだことを学内での学習にどのようにつなげて学びを深めていくのか注目して検討を行う。各科目間の位置づけと関係性を整理し、より効果的な学習方法の検討を探る一助としたい。

表1 介護福祉士養成施設における教育内容（例）

領域	教育内容	ねらい	教育に含むべき事項
介護	介護の基本 (180時間)	「尊厳の保持」「自立支援」という新しい介護の考え方を理解するとともに、「介護を必要とする人」を、 <u>生活の観点から捉えるための学習</u> 。また、介護における安全やチームケア等について理解するための学習とする。	① 介護福祉士を取り巻く状況 ② 介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ ③ 尊厳を支える介護 ④ 自立に向けた介護 ⑤ <u>介護を必要とする人の理解</u> ⑥ 介護サービス ⑦ 介護実践における連携 ⑧ 介護従事者の倫理 ⑨ 介護における安全の確保とリスクマネジメント ⑩ 介護従事者の安全
	介護実習 (450時間)	① <u>個々の生活リズムや個性を理解するという観点から様々な生活の場において個別ケアを理解し</u> 、利用者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割について理解する学習とする。 ② 個別ケアを行うために個々の生活リズムや個性を理解し、利用者の課題を明確にするための利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった介護過程を展開し、 <u>他科目で学習した知識や技術を統合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を習得する学習</u> とする。	

※「社会福祉士養成施設及び介護福祉士養成施設の設置及び運営に係る指針について」(厚生労働省社会・援護局長通知：2011)より本研究に直接関連する「介護の基本」「介護実習」のみ抜粋して作成した。下線は筆者が加筆した。

表2 資格取得時の到達目標

<ol style="list-style-type: none"> 1. 他者に共感でき、相手の立場に立って考えられる姿勢を身につける 2. あらゆる介護場面に共通する基礎的な介護の知識・技術を習得する 3. 介護実践の根拠を理解する 4. 介護を必要とする人の潜在能力を引き出し、活用・発揮させることの意義について理解できる 5. 利用者本位のサービスを提供するため、多職種協働によるチームアプローチの必要性を理解できる 6. 介護に関する社会保障の制度、施策についての基本的理解ができる 7. 他の職種の役割を理解し、チームに参画する能力を養う 8. 利用者ができるだけなじみのある環境で日常的な生活が送れるよう、<u>利用者ひとりひとりの生活している状態を的確に把握し</u>、自立支援に資するサービスを総合的、計画的に提供できる能力を身につける 9. 円滑なコミュニケーションの取り方の基本を身につける 10. 的確な記録・記述の方法を身につける 11. 人権擁護の視点、職業倫理を身につける
--

* 「介護福祉士養成課程における教育内容の見直しについて」(厚生労働省;2009)より抜粋して作成した。下線は筆者が加筆した。

1. 研究の背景

前述の厚生労働省社会・援護局長通知(2011)における介護福祉士養成教育の内容は、資格取得時に専門職としてのスタートラインに立てる力を身につけられるように、学習すべき内容として示されており、平成29年度から養成校の卒業生も必須となる介護福祉士国家試験においても、その内容について問われることになる。このため、示された通りの教育内容を学んでいくことは当然求められる。だが示された内容ごとに学ぶのではなく、より質を高め、現場でいかせる力にしていく必要があるのではないだろうか。

また、本学人間福祉学科のカリキュラム・ポリシーにおいても「①人間の福祉と介護に関する基幹科目、人間性の理解、社会福祉制度・政策、福祉支援に関する知識と演習および実習を通じて、福祉社会に向けた研究および福祉実践能力を備えた人材を育成するカリキュラムを編成」³とあり、授業で学ぶ知識と実習で学ぶことの全体を通じて教育がなされていくことが示されている。人間福祉学科における介護福祉士養成としても同様の意識である。

さらに、介護福祉士という専門職の養成課程である側面から「各科目理解の上、総合的に活用して現場で使える力を養う」とともに、大学教育である側面から「学問的探求や研究的な視点を持った学び」

も必要となる。両方の側面からも、授業で調べたこと・学んだことを実習でいかす、実習で学んだことを大学の授業に戻っての学びにいかす、ということをも学生に意識化させることが学習をより効果的に進めるためには重要である。そのためには学生が主体的に学ぶ姿勢を身につけることや、学生の様子に応じて教員がファシリテーターの役割も担うことも必要となる。近年注目されるアクティブ・ラーニング(能動的学修)の視点を持ち学内の授業においても主体的な学習をすることで、実践的な学びの場である実習にいかすことができる。しかし、アクティブ・ラーニングを活用しての授業展開や科目間連携を意識した取り組みについての論文はあまり見られない。つまり、重要性や有用性は理解されていると思われるが、十分な検討や活用がなされていないことが推察される。アクティブ・ラーニングの姿勢を身につけることは、将来専門職として学び続ける基礎にもなると考え、授業展開を試みていきたい。

2. 先行研究

ここで先行研究について概観していく。

(1) 介護福祉士課程における科目間連携

福田ら(2013)は、介護福祉学科でのFD活動を通して、教員自身が「科目間連携」を意識することを目的に「介護過程」における科目間連携の「見え

る化」による検討を試み、介護実習を核とした科目間連携の重要性を述べている。

田家(2010)は、2009年度から始まった新カリキュラムによる介護実習の課題を明らかにし、実習目標に沿って効果的な学習ができるよう授業内容を見直す必要性を述べている。

浦(2015)は、介護福祉教育の変遷をたどり、カリキュラム改正の前後における教育のあり方の違いや普遍的な課題を明らかにしている。介護実習の事前・事後教育のあり方、教育方法の工夫や教育力の向上とともに、科目間連携が課題であると指摘している。

(2) その他の課程等での科目間連携

介護福祉士養成課程だけではなく、他の養成課程や大学教育の場でも、科目間連携について注目がなされている。

皆川ら(2015)は、専門教育科目において複数の科目が連携することで技術と知識の両面から発展的な学習効果が得られる授業展開がなされてきたことを背景に、初年次教育においても相互連携を取り入れて授業を展開している。そのなかで、大学生らしい自主性や自律的な学びの態度を確立することが最も課題となると指摘している。

榊原ら(2017)は、保育士養成における授業内容の改善として、「現場に即した授業内容を教授する」「共同で授業を展開していく」などの観点から、科目間連携の必要性について述べている。

高橋(2017)らは、小学校教員免許の取得を目指す学生に対し、図工と家庭科の教科間連携の学習プログラムを開発し、授業を展開している。結果として多くの学生が教科間連携の効果を感じられているとして、その有効性を述べている。

谷口・西岡(2017)は、保育者養成教育における授業展開を、各科目の関連性や連携を意図し、さらにアクティブ・ラーニングを共通項として構想し実践を行っている。その結果、科目間連携のためには、シラバスから共通項を見出し、相乗効果が得られるような学習活動を行うことが課題であると述べている。

(3) 介護福祉士課程における科目間連携アクティブ・ラーニング

近年大学教育においても注目されるアクティブ・ラーニングは、中央教育審議会(2012)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」⁴において、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。」と示れ、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。」と述べられている。

介護福祉士養成教育においても重要な教育のあり方としてとらえられる。

こうしたアクティブ・ラーニングを介護福祉士教育課程で教育に取り入れている研究がみられる。

大倉ら(2015, 2016)は、介護福祉士課程の初年次導入プログラムとして、アクティブ・ラーニングの手法からマインフォマップを活用した授業展開や、学生の発表に対する評価方法としてルーブリック評価を導入している。これらが介護福祉士教育の質の向上のために必要な教育プログラムになりうる可能性を示唆している。

高橋(2017)は、授業内でグループ討議や検討を行った後にロールプレイを実施することで、学生の主体的学び・創造性が発揮され、次の学習意欲につながるとしている。

(4) その他の課程等でのアクティブ・ラーニング

介護福祉士養成課程だけではなく、他の養成課程や大学教育の場でも、アクティブ・ラーニングについて注目がなされている。

天池(2016)は、アクティブ・ラーニングの長所(学生の意欲や問題解決能力の向上)だけではなく、主体性を強要するという問題を含むものであるとし、社会構成主義の手法を参考に主体性を発揮できる教育のあり方を考察している。

浜野(2017)は、社会福祉士の養成教育が、職業倫理に基づいた価値や判断力をもって実践できる知識と技術を身につける学習内容が求められるようになっていくとし、アクティブ・ラーニングの方法を活用して、コミュニティソーシャルワーク演習プロ

グラムを開発している。

笠原ら（2008）は、講義科目でアクティブ・ラーニングを可能にする授業の構造について、社会福祉専門職教育関連科目における実践から検討している。

村田ら（2016）は、作業療法士養成教育において、アクティブ・ラーニングの活用度について調査し、作業療法士としての専門教育に必要な指導観について考察している。そのなかで、アクティブ・ラーニングを効果的に用いるためには、学生に主体性と当事者意識を持たせることが必要だと述べている。

3. 研究方法

- (1) 研究対象：本学人間福祉学科介護福祉士課程に所属する2年生
平成28年度12名
平成29年度14名

- (2) 研究期間：平成28年4月～平成29年10月

(3) 研究方法

- (i) 春学期に介護の基本Ⅱを開講

平成28・29年度ともに単元「その人らしさと生活ニーズの理解」の講義を行い、要介護高齢者（介護サービスの利用者；以下、利用者とする）の生きてきた時代・文化・生活習慣・価値観の違いなどを知り、個別ケアの重要性を理解した上で、夏休みに行う介護実習Ⅰで利用者と接する際にいかせるように「調べてみよう都道府県」と「調べてみよう私たちが知らない日本の出来事」の課題に取り組む。

- (ii) 夏休みに介護実習Ⅰ（12日間）を実施

平成28・29年度ともに(i)で学んだ内容を活用する。

- (iii) 秋学期に介護の基本Ⅲを開講

平成28・29年度ともに介護実習Ⅰでの学びを振り返り、介護の基本Ⅱで学んだことがどのようにいかされたか、今後の課題などを話し合うグループワークを行い、その内容も踏まえて各自でレポートにまとめ、次回の授業時に提出を受け付けた。

- (iv) 本論において(iii)のレポートの内容の一部検討や学習の様子について概観する。

- (v) 倫理的配慮

該当学生に対し、研究の目的と個人情報の遵守及び成績評価には一切関係しない等について口頭説明を行い、同意を得られた平成28年度2年生12名のうち10名、平成29年度2年生14名のうち14名(全員)、合計24名を結果・分析の対象とした。

4. 結果

- (1) 本学のカリキュラム

厚生労働省社会・援護局長通知（2011）において示されている教育内容にある「介護の基本」と「介護実習」（前掲表1）について、本学では以下の通り開講している。

表3 本学のカリキュラム

厚労省教育内容	授業科目名	開講時期
介護の基本	介護の基本Ⅰ	1年次秋学期
	介護の基本Ⅱ	2年次春学期
	介護の基本Ⅲ	2年次秋学期
	介護の基本Ⅳ	3年次春学期
	介護の基本Ⅴ	3年次秋学期
	介護の基本Ⅵ	4年次春学期
介護実習	介護実習Ⅰ	2年次夏休み（12日間）
	介護実習Ⅱ	2年次春休み（18日間）
	介護実習Ⅲ	3年次夏休み（3日間）及び3年次春休み（25日間）

* 〇の部分为本研究の主な対象となる

*実習は主に特別養護老人ホーム・介護老人保健施設で行う

- (2) 介護の基本Ⅱでの学び

筆者が授業を担当した平成28年度・29年度においては、前述の研究方法に示した講義（7回に分けて実施）の後、アクティブ・ラーニングの視点で学生たちが課題に取り組んだ（表4）。

(3) 介護実習Ⅰでの学び

本学における介護実習は、介護福祉士課程としての初めての臨地実習である。主な実習内容として「個々の生活リズムや個性を理解するという観点から、さまざまな生活の場における個別ケアを理解し、利用者・家族とのコミュニケーションの実施、介護技術の確認、多職種協働や、関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割につい

て理解する。特別養護老人ホーム・介護老人保健施設などの介護保険施設が果たす社会的な役割と、サービス利用者の特質を理解し、介護ニーズが多様化している状況での適切な介護サービスの提供の基礎を学ぶ。」⁵ことを目的として行う。ここでは日々の生活支援の中で、一人ひとりの利用者との関わりをとおしてアセスメントを行う練習も含まれる。

表4 アクティブ・ラーニングの視点で取り組む課題

【スケジュール】			
差1回	課題の説明	アンケート回答 ^{*1}	担当分担
第3・4回	課題1の発表	第5回	課題1の発表内情準備（個人作業）
第2回	アンケート結果配布	第6・7回	課題2の発表
課題1の発表内情準備（個人作業）			
【課題1】調べてみよう都道府県			
<ul style="list-style-type: none"> ・くじ引きで一人ずつ3県または4県を担当し、1県について3分発表。 ・レジュメはPowerPointで作成。スライドは4枚作成。絵や写真を張り付けて見やすく作成する。 ・調べてくること <ul style="list-style-type: none"> ①都道府県庁所在地・人口・高齢化率 ②地理など：河川、山、海、湾、平野、丘陵、湖、都道府県の樹木、気候、建物他 ③歴史など：旧国名、名称の由来、出来事他 ④名産品：果物、野菜、肉、魚、加工食品、料理、民芸品、工業製品他 ⑤出身の有名人：利用者さんが知っているような年代の人、歴史上の人物 ⑥方言、歌、民謡、民話他 ⑦観光名所、温泉、寺社、祭り、世界遺産など ⑧地域の話題・ローカルニュース（2017年4月以降で調べる） ⑨アンケート結果からいえること ⑩行ったことがある人、住んでいたことがある人は、写真やエピソードの提供にご協力を！ ⑪都道府県のPRキャッチフレーズ作ろう：スライド1枚目に記載 ⑫利用者さんとの会話で活用できそうな内容：会話の例 ⑬上記内容が示されていれば、その他の内容をプラスすることは大歓迎！ 			
【課題2】調べてみよう私たちが知らない日本の出来事			
<ul style="list-style-type: none"> ・くじ引きで2～3人グループをつくり、調べる年代を決めます（大正時代から平成28年まで約10年毎に区切る）。1グループ15分発表。 ・レジュメはPowerPointで作成。スライドは24枚作成。絵や写真を張り付けて見やすく作成する。レジュメのほかに、イラスト、動画、音楽、実演 etc. 何でもありますが、いろいろ用意してください！ ・調べてくること <ul style="list-style-type: none"> ①できるだけ1年ごとにどんな年であったか：社会の出来事（政治・経済・事件・病気・流行・遊び・生活ほか） ②言葉や出来事の説明 ③その当時を知る人へのインタビュー ④アンケート結果からいえること ⑤例90歳の方が、〇歳のころ・・・など ⑥利用者さんとの会話で活用できそうな内容：会話の例 ⑦上記内容が示されていれば、その他の内容をプラスすることは大歓迎！ 			

*1 アンケート内容：課題1について、都道府県の場所を把握しているか、漢字で正しく表記できるか、白地図を用意し、解答を求めた。47都道府県のうち、全ての正解者は3名、20～30の正解者が多くを占め、最も少ない正解は9都道府県であった。さらに各都道府県について「知っていること」「イメージ」「行ったことがある人はエピソードを記入」とする自由記載のアンケートを行った。課題2については、大正時代から現在にかけておよそ10年単位で区切り、その年代のできごとについて「知っていること」「イメージ」について自由記載のアンケートを行った。さらに課題1・2のそれぞれに発表者に対して「知りたいこと：発表者へのリクエスト」を記入する欄を設けた。

（備考）春学期15回の授業のうち、前半の7回が講義、後半の7回を上記課題に取り組み、最後の1回で全体のまとめを行い、介護の基本Ⅱで学んだ内容を介護実習Ⅰで活かしてくるようにながした。また介護の基本Ⅲで振り返りを行う予定であることを伝えている。下線部分が特に授業内容として重視した点である。

(4) 介護の基本Ⅲでの学び

提出されたレポートの中から、担当教員が今後の授業に役立てる観点から以下の2点に注目し、記載内容を集約する。集約の対象は倫理的配慮で述べた通り、同意を得られた24名の学生レポートである。なお内容に付記した人数は同様の内容が示されている人数を表記した。

(i) 介護の基本Ⅱで学んだことが、実習で役立った・活用できた場面について

【肯定的な内容】

- 会話のきっかけになりコミュニケーションがとれた。(22人)
- 昔の出来事を調べていたので話が合って、会話が盛り上がった。(18人)
- 知っている都道府県の話題になり、地名や食べ物・名産品などを覚えていたので、会話が広がったり、表情が明るくなったり、利用者さんと活発なやり取りができた。(11人)
- 自分が調べた内容以外も、発表を聞いて印象に残っていたので、役立った。(9人)
- 会話が弾むことで、利用者に受け入れてもらえている気がした。(7人)
- 戦争や原爆について話してくれる利用者がいて、授業で発表を聞いて少しわかって実習に行かれたので会話をしたり、傾聴しやすかった。(6人)
- 実習中、みんなでまとめた発表資料を常に持参して休憩時間や一日の終わりに見て、会話に役立てられるように意識した。(4人)

【不十分であったとする内容】

- 調べたけれど、発表を聞いたけれど、きちんと覚えていなかったので役立たなかった。(18人)
- 各地にまつわる歌・民謡や高齢者の方たちが若かったころの芸能人や演歌など知っておくとよかった。(11人)
- ○年生まれの方が△歳ごろの出来事、とわかると、会話しやすくなる。特にその方が20歳前後の頃が一番話が弾むので、そうした見方で時代の出来事がわかっていかせると、意味がある。(7人)
- 戦争や原爆のことを自分から話題にしていいか迷った。(5人)
- 配布された発表資料を持ち歩いていけど、活用で

きなかった。(5人)

- 都道府県名だけではなく、市町村や旧国名など知っているときよかった。(4人)
- 実習したフロアは、認知症の人が多く学んだことを会話に役立てられなかった。(3人)
- (ii) どのように取り組めばもっと役立ったと思うか
 - 自分のことも話せると会話が弾むが、自分の地元のことを意外と知らなかったので、話せるようにしていきたい。(12人)
 - 知っていれば会話に役立つことを実感したので、ただ決められたことを調べたり発表を聞き流すような受け身にならずに、自分から興味をもって身につくようにする。(8人)
 - 住んでいたところや昔のことを話したくなさそうな人もいたので、話題作りが難しく、そうした時のコミュニケーション方法を学んでおくとよかった。(7人)
 - 認知症の方に昔住んでいた所の話題をふると帰宅願望が出てくることもあり、話題にするタイミングが難しかったので、認知症の方とのコミュニケーションも学んでいくべきだった。(7人)
 - 話題の内容として都道府県や時代の出来事を知るだけじゃなく、傾聴、反復、要約などコミュニケーション技法も身につけていかれたら良かった。(6人)
 - 通っている大学のことも話せると会話のきっかけになるが、大学のある場所のことをよく知らなかったので、わかっておくべきだった。(5人)
 - 全国各地を知るだけではなくて、実習施設のある場所のことも知っていくべきだった。(4人)
 - 課題の項目をただ調べて資料にしたり、発表も時間が短いので十分に伝えられなかったり、聞き流してしまうので、自分なりの注目点をもって調べたり、発表するように工夫すると、実習で活用できると思う。(3人)
 - 祝祭日についても話題になるので、日にちや由来を知っておくといいと思う。(2人)
 - 中国、韓国、ドイツ、フランスなどで暮らしたり行ったことのある方たちがいて、世界中を事前学習では調べられないが、普段の生活から外国のことにも関心をもっておく。(1人)

5. 考察

本来、介護実習に直接的に連携する科目として理解されるのは「介護総合演習」と「介護過程」であるが、「介護の基本」としても、表1の下線部分で示すように関係性が見られることから、科目間連携を意識して授業展開を試みた。また、そうして学内授業で学んだ内容を主体的に実習にいかすためにもアクティブ・ラーニングの視点を重視した内容で行っている。「介護の基本Ⅱ」で学んだことを「介護実習Ⅰ」でいかす⇒「介護実習Ⅰ」で経験し学んだことを「介護の基本Ⅲ」で振り返り学習を深める⇒「介護の基本Ⅲ」で学んだことを「介護実習Ⅱ」でいかす・・・と、学習が継続していく。

このような観点から今回の課題の提示においては、以下のような特徴がある。都道府県について調べる際には、現代ではインターネットなどの普及により多くの情報があふれている。しかし、今回の課題では「グルメマップ」や「観光ガイド」が目的ではなく、発表担当地域の理解が一端であり、さらには調べたことを利用者とのコミュニケーションや利用者理解にいかすことである。そのため、実習で活用できそうな内容としてまとめること、利用者との会話の例を考えさせることなどを組み込んでいる(表4下線部参照)。まだ実習経験のない時点の学生にとって、利用者の様子を想像しながら会話の例を考えることは困難であったが、調べたことを会話でいかそうとする姿勢が多くみられている。

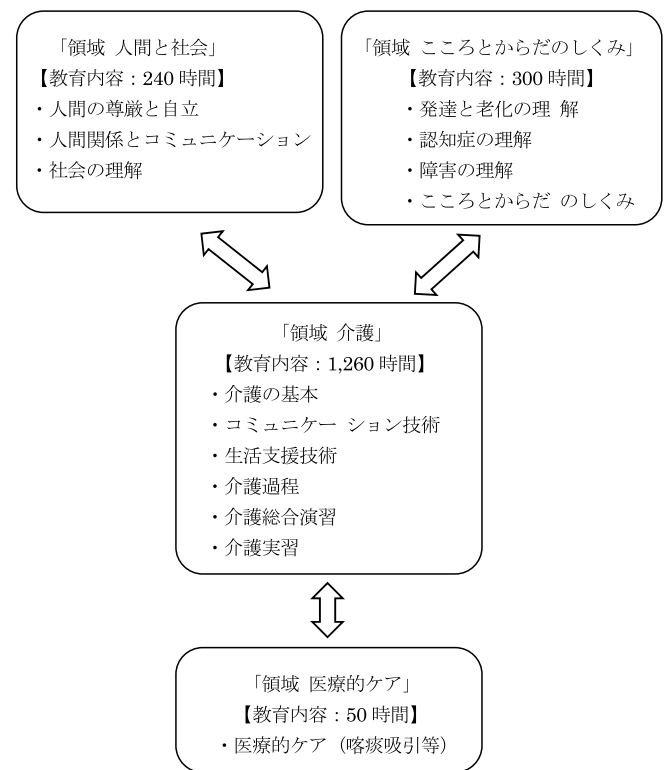
科目間連携、アクティブ・ラーニングの視点を意識して行ってきた授業を学生のグループワークをとおして振り返ると、概ね効果的であったことがうかがえる。一方で、学習の当事者である学生からの意見により、授業改善の示唆を得る結果となった。

概ね効果的である視点としては、①学生自身が学内の授業で学んだことを実習で活かすことができた実感している点と、②学生の学びを科目間連携を意識して進めることができたアクティブ・ラーニングの手法と取り入れることで、実習に活かす力につながっている点である。

授業改善の示唆としては、①前述の「どのように取り組めばもっと役立つのか」にあるように、さらにアクティブ・ラーニングを進めるための課題内容や発表方法の精査や、科目間連携を意図した授業で

学んだことのいかし方(資料の活用方法)を具体的に示すこと、②さらなる科目間連携として、「認知症の理解」「コミュニケーション技術」などを組み込んでいく必要性である。①について、授業で課題に取り組むことがベースとなり、さらに各自の視点で必要な内容を書き込み自分自身で活用できる資料としていくことなどが、アクティブ・ラーニングの視点をさらにいかすことにつながると考える。②について、本研究においては筆者が担当する科目から取り組んだ内容であるが、教育の全体像からとらえると、当然求められる内容である。

そこで、福田ら(2013)の示す「介護実習を核と

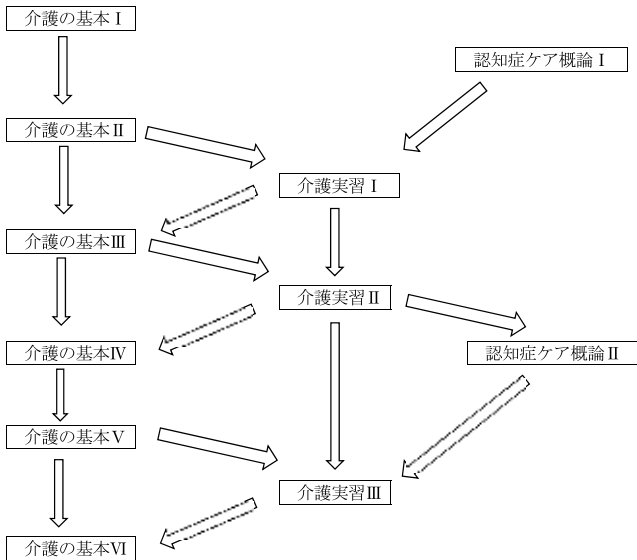


- * 介護が実践の技術であるという性格を踏まえ、
 - その基盤となる教養や倫理的態度の涵養に資する「領域 人間と社会」
 - 「尊厳の保持」「自立支援」の考え方を踏まえ、生活を支えるための「領域 介護」
 - 多職種協働や適切な介護の提供に必要な根拠としての「領域 こととからだのしくみ」
 - 医療職との連携のもとで、医療的ケアを安全・適切に実施できるよう、必要な知識・技術を修得する「領域 医療的ケア」
- の4つの領域で教育内容が構成されている。

* 厚生労働省(2009)「介護福祉士養成課程における教育内容の見直しについて 新しい介護福祉士養成カリキュラムの基準と想定される教育内容の例」に示された領域の編成に関する図を参考に「領域 医療的ケア」を加えて筆者が作成

図1 領域・教育内容の関連についてのイメージ

した科目間連携マップ」を参考に介護福祉士養成教育内容の全体について科目間連携のイメージを整理し（図1）、本研究で取り上げた「介護の基本」「介護実習」の学習内容の流れを図2として示す。



*「介護実習」を中心に「介護の基本」と学生から指摘のあった「認知症の理解」の学習の流れを図式化。
矢印⇒は、学習の流れを指す。

図2 科目間連携のイメージ

おわりに

本来であれば、介護福祉士養成課程科目の全体像を俯瞰して、科目間の関係性や科目間連携のあり方を検討するところであるが、本学着任後2年間にわたり科目を担当し、学生の学びの様子、成長する姿を間近にみるなかで、さらなる学習効果を得られるような授業の検討は、全体像の一部分に過ぎないのであるが、全体像を検討する際の要素の一つにはなるのではないかと考え、本研究を実施した。

本研究をとおして、①科目間の関係性から科目間連携を意識することの必要性、②アクティブ・ラーニングの有効性を確認することができた。

さらに今後の課題として、①今回得られた結果を授業の改善に役立てていく、②介護実習Ⅱ・Ⅲについてもどのようにいかされていくのか継続して取り組んでいく、③「コミュニケーション技術」「認知症の理解」も含めて、連携のあり方を考えていく、④今回は介護福祉士養成における教育内容の全体像

のごく一部の検討に過ぎないため、全体像をとらえた検討に発展させていく、等が挙げられ研究を継続していきたい。

謝 辞

本研究にご協力いただきました学生の皆さんに厚く御礼申し上げます。

《引用文献》

- 1 厚生労働省（2009）「介護福祉士養成課程における教育内容の見直しについて 新しい介護福祉士養成カリキュラムの基準と想定される教育内容の例」より一部抜粋して引用 <http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/shakai-kaigo-yousei03.pdf>（2017/10/29）
- 2 厚生労働省社会・援護局長通知（2011）「社会福祉士養成施設及び介護福祉士養成施設の設置及び運営に係る指針について」（52ページ）より引用 http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/care/dl/care_7.pdf#search=%27%E5%8E%9A%E7%94%9F%E5%8A%B4%E5%83%8D%E7%9C%81%E9%80%9A%E7%9F%A5+%E4%BB%8B%E8%AD%B7%E7%A6%8F%E7%A5%89%E5%A3%AB+%E6%8E%88%E6%A5%AD%E7%A7%91%E7%9B%AE%27（2017/10/29）
- 3 「目白大学人間学部人間福祉学科カリキュラム・ポリシー」より引用（下線は筆者が加筆した。）
<https://www.mejiro.ac.jp/univ/about/cp/>
（2017/10/29）
- 4 中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf（2017/10/29）
- 5 実習施設に配布される「目白大学人間学部人間福祉学科介護福祉士課程介護実習概要」（2015）より引用。

《参考文献》

- 天池洋介(2016)「アクティブ・ラーニングでスウェーデンと福祉を学ぶ:教室における「私たちの社会」の再構成をめざして」『日本福祉大学社会福祉論集』135号 139-157
- 福田明・尾台安子・釜土禮子他。(2013)「『介護過程』における科目間連携の『見える化』による検討と今後の課:2012年度本学介護福祉学科FD活動報告」『松本短期大学研究紀要』22号 47-58
- 浜野智之。(2017)「相談援助演習における小地域福祉活動実践事例を活用したコミュニティソーシャルワーク演習方法の研究」『明星大学研究紀要』53号 71-94
- 笠原千絵・山本秀樹・加藤善子。(2008)「講義科目でアクティブ・ラーニングを可能にする基本構造 - 社会福祉専門職教育関連科目における実践から」『研究紀要 / 関西国際大学 [編]』9号 3~23
- 厚生労働省社会・援護局長通知 (2011)「社会福祉士養成施設及び介護福祉士養成施設の設置及び運営に係る指針について」
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/care/dl/care_7.pdf#search=%27E5%8E%9A%E7%94%9F%E5%8A%B4%E5%83%8D%E7%9C%81%E9%80%9A%E7%9F%A5+%E4%BB%8B%E8%AD%B7%E7%A6%8F%E7%A5%89%E5%A3%AB+%E6%8E%88%E6%A5%AD%E7%A7%91%E7%9B%AE%27
(2017/10/29)
- 皆川武・西村明也・西尾典洋他。(2015)「メディア表現学科における科目間の相互連携を取り入れた初年次教育の展開とその課題」『目白大学高等教育研究』第21号 103-111
- 村田奈保子・奥村チカ子・大丸幸。(2016)「作業療法教育に必要な指導観 (第2報) 専門教育の中でのアクティブ・ラーニングの活用について」『九州栄養福祉大学研究紀要』13号 265-273
- 大倉義文・高瀬文広・古野みはる。他 (2016)「介護福祉士初年次導入教育プログラムへのルーブリック評価の導入:マインドマップ活用プログラムにおけるジェネリックスキルの評価」『介護福祉教育』21号 156-168
- 大倉義文・古野みはる・黒木まどか・栢豪洋。(2015)「介護福祉士初年次アクティブ・ラーニング教育におけるルーブリック評価:ルーブリック評価の指標を活用するジェネリックスキルの評価法の標準化と改善に関する検討」『介護福祉学』22号 114-123
- 榎原尉津子・杉山佳菜子・大久保友加里。(2017)「保育現場で求められている能力とその指導 (4) 科目間連携の重要性についての一考察」『鈴鹿大学短期大学部紀要』37号 125-133
- 高橋美岐子。(2017)「介護人材育成講座 (第161回) 主体性を持った介護福祉士の養成:アクティブ・ラーニング型授業の展開」『地域ケアリング』19号 41-47
- 高橋美登梨・佐藤仁美・江川あゆみ。(2017)「『図画工作』と『家庭』の教科間連携の取り組み:木版画を施した布を用いた巾着袋の製作」『目白大学高等教育研究』第23号 21-28
- 谷口征子・西岡將美。(2017)「保育者養成教育における実践力を身につけるためのアクティブ・ラーニングを活用した授業展開の構想:科目間連携の特色を生かして」『小田原短期大学研究紀要』47号 242-251
- 田家英二。(2010)「介護福祉士養成教育の改革と今後の課題 - 介護実習を焦点に」『鶴見大学紀要』47号 39-44
- 浦秀美。(2015)「『介護過程』の教育方法に関する課題:科目間連携の重要性と今後の課題」『長崎国際大学論叢』15号 85-94

(受付日:2017年10月31日、受理日2017年12月17日)